P1-040

性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発(3)
ー「クイズ」の項目の予備調査結果の報告ー

田中 駿[1]、郷間 安美子[3]、加藤 寿宏[4]、落合 利佳[5]、池田 友美[6]、清水 里美[7]、井上 和久[8]、小谷 裕実[9]、武藤 葉子[10]、大久保 圭子[11]、大谷 多加志[3]、圓尾 奈津美[12]、桐原 彩[13]、牛山 道雄[2]、郷間 英世[2]

[1]京都教育大学 特別支援教育臨床実践センター、
[2]京都教育大学 教育学部発達障害学科、
[3]京都国際社会福祉センター、[4]京都大学 医学部、
[5]大阪大谷大学 教育学部、[6]摂南大学 看護学部、
[7]平安女学院大学 短期大学部、[8]大和大学 教育学部、
[9]花園大学 社会福祉学部、[10]奈良教育大学 特別支援教育センター、
[11]兵庫県立赤穂特別支援学校、[12]京都市保育連盟、
[13]京都教育大学大学院

【はじめに】
我々は発達障害が注目され社会性や行動などの評価ニーズが大きくなってきていることから、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発を2014年より行っている。今回はその中から「クイズ」(なぞなぞ)の項目の予備調査結果を報告する。「クイズ」は出題者と回答者に分かれて行われるもので、(1)相手の話を聞く、(2)話から答えを想像する、(3)想像した答えを声に出すといった過程がある。そのため言葉から想像することが苦手な自閉症児にとっては困難な課題であると考えられる。

【方法】
対象は2歳5人、3歳32人、4歳18人、5歳36人、6歳23人、計114人の幼児である。課題は「動物」「果物」「車」「乗り物」「家にあるもの」「とんち」をテーマにして計22問を出題した。問題文はそれぞれ、動物は身体的な特徴(「耳が長くてピョンピョンはねる動物はだれだ?」)、果物は外見的特徴(「細長く曲がっていて、黄色の果物なんだ?」)車と乗り物と家にあるものは用途(「火事の時に火を消す車はなんだ?」)、とんちは一般的事実(「誰でも1年に1回ひとつ増えるものなんだ?」)を回答の手がかりとした。得られた結果から、それぞれの課題の年齢別通過率(正答率)を求めるとともに、それぞれが何歳レベルの課題にあたるかを検討した。

【結果】
項目の通過率は主に3歳から4歳にかけて上昇する項目と、4歳から5歳にかけて上昇する項目に分かれていた。「動物」は2 ~ 4歳、「果物」「車」「乗り物」は4 ~ 5歳、「家にあるもの」は5歳で正答率が50%を超えていた。「とんち」は6歳でも正答率が50%を超えなかった。テーマごとの難易度は「動物」<「果物」≦「車」<「乗り物」≦「家にあるもの」<「とんち」であった。22問中の通過数は、3歳は4.7±3.4(平均値±標準偏差)、4歳は9.9±3.0、5歳は14.6±3.3、6歳は15.5±2.3であり、同時期に評価したS-M社会生活能力検査結果SQと3歳と5歳で正の相関(3歳:r=0.50、5歳:r=0.62)を認めた。性差の検討では、女児の方が得意な傾向がみられたがほとんどの項目で有意な差はみられなかった。

【考察】
本検討結果から、「クイズ」は3 ~ 5歳で獲得する発達課題と考えられた。したがって「幼児版社会性・行動評価尺度」の構成課題としては、3歳および5歳対象の課題として含めることが可能と思われた。性差については例数を増やし再検討する必要があると考えられた。

P1-041

名張市の発達支援教室でのペアレント・トレーニングの取り組み

寺川 えり子[1]、有年 貴子[1]、古川 恵美[2]

[1]名張市子ども発達支援センター、
[2]畿央大学 教育学部

【目的】
名張市では、平成24年度から名賀医師会協力の下、年中児全員を対象に5歳児健診を実施している。その中で、望ましいと判定された保護者に発達支援教室の参加をすすめている。対象児の保護者は育児の困り感を抱いていることが多く、保健師は保護者に寄り添い、子どもの行動変容のための技術を獲得し親子関係をより良好な状態にすることを目的とした全8回のペアレント・トレーニング「子育てのコツ講座」を実施している。さらにフォローアップとして合同同窓会を開催している。今回、ペアレント・トレーニングの経験を保護者がどのように捉えているのかをフォローアップの機会に検討したので報告する。

【方法】
平成26年度は3グループ計17人、平成27年度は2グループ計10人対象に実施した。ペアレント・トレーニング全8回の内容は、1回「教室での子どもの様子を見ましょう」、2回「子育てのコツについての話」、3回「ほめることを習慣にしよう」、4回「子どもの行動への良い注目をしよう」、5回「親子タイムと指示の出し方」、6回「まとめ」、7回「保護者同士で話をしましょう」、8回「教室での子どもの様子を見ましょう」とし、宿題を通して行動観察を行い、グループワークを実施した。フォローアップのための合同同窓会は平成29年2月に実施した。各グループでカフェ型トークを行い、就学後の子どもの目指す姿などのテーマに沿って話し合った上で各自が自分の思いを語った。開始前に、本調査への協力を依頼した。同意を得た保護者に対し、児への関りについて無記名自記式質問紙調査を行った。質問項目は、ペアレント・トレーニングが「好ましかった」「好ましくなかった」、さらに自由記述でその理由とした。好ましいカテゴリーには、「役立った・勉強になった」「子どもも親も成長した」「同じ悩みを持つ仲間ができた」、好ましくなかったカテゴリーには、「他機関との連携不足」「上手く活用できない」に分けられた。

【結語】
教室終了後も、保護者同士自主的に会合するなど活動していることから、同じ思いを持つ保護者同士のグループ化を図ることができた。幼児期後半の育児において保護者の不安や育児負担感軽減を図れるよう学ぶ機会を継続して提供していく必要がある。また今後、5歳児健診や発達支援教室等を通して、保育・幼稚園や教育との連携の強化を図る必要がある。

Presented by Medical*Online